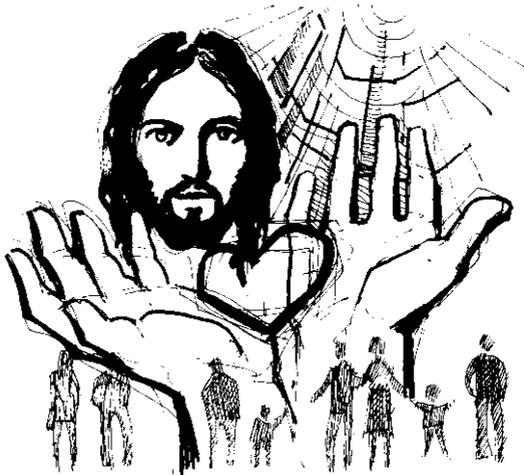


聖霊降臨後第3主日

2020年6月21日

神のみ言葉によって立ち、神の子とされる



日本聖公会東京教区
東京聖三一教会

神のみ言葉によって立ち、神の子とされる

司祭マリア・グレイス笹森田鶴

預言者エレミヤも、そして主イエスの弟子たちも、窮地に陥っていました。時代は違えども、エレミヤも弟子たちも神のために、神によって召し出された者たちです。神から与えられた使命を果たすことができれば、本来多くの人びとに幸福をもたらすことになるはずでした。それにも関わらず、この人びとがその使命に忠実であろうとすればするほど、自分の命さえも危険な状態になっていったというお話が今日の聖書箇所です。

預言者エレミヤが神から与えられた言葉を語れば語るほど、当時の指導者や権力者たちを非難することとなりました。そして、それが自分への暴力と嘲りを引き出していくこととなります。自ら望んだ訳でも、自ら思いついた訳でもない神からの言葉が、エレミヤを苦しめます。しかしその言葉は彼の心と体の奥底に既にあり、口から次々に湧き上がり、止められません。

とうとうエレミヤは神に訴えます。「あなたが誘惑したからこのような恐ろしい状態になってしまった。」と。しかし一方で、その訴えの結末をエレミヤは神に託します。「主は、恐るべき勇士として、わたしと共にいます」。このように神への絶対的な信頼を同時に語りながら、自らへの迫害の日々を過ごしていったのでした。なぜならば、エレミヤは直接神から与えられる、神の言葉に寄って立っていたからでした。

今日の福音書にも、迫害に合うであろう弟子のこれからのことが主イ

エスさまによって述べられています。そして主イエスさまは弟子たちを励まします。

「あなたがたが命を奪われ、誰かに売られるようなことがあったとしても、神に向かってひたすら生きるならば、必ず天の父が共にいてくださり、起こったことをつぶさに見、決してあなたがたを孤独にはしない。」

この励ましが与えられるのは弟子たちの努力の結実では決してありません。すべては神の恵みでした。このキリストの励ましの言葉に弟子たちが寄って立っていくようになるのですが、それを弟子たちが確信できたのはそれまでの主イエスさまの言動を目の当たりにしていたからでした。どのような苦しい状況にあったとしても、主イエスさまの言葉と行いが弟子たちを励まし支えていきました。

なぜ、エレミヤも弟子たちも、神の思いを遂げようと努めたにも関わらず、人々からの迫害を受けることになったのでしょうか。

それは、「神の思い」、「天の国」への当時の人びとの理解がまちまちであったからです。多くの人びとが自分の思いや方法において神に近づこうとしていたからでした。

人間に与えられた律法をどのように解釈すると良いのか、どのように信仰を実践するべきなのか、神のために聖であるためにはどうしたらよいか、誰が「聖である」と神に認められているのかなどの、本来真摯な問いかけであったとしても、残念ながらありとあらゆる神についての理解を自由に持つことのできる人間の弱さの中で、自らの勝手な理解が膨らんでいったのです。

するとそれぞれの答えを求め、それぞれがこうあるべきだという理想を掲げ、別々の生き方を選び取ることになります。さらにこれが真理についての答えや生き方であるからこそ、人間の間には排他的な対立を生じさせることとなっていきました。

エレミヤや弟子たちが本来の神さまや主イエスさまの思いを伝えようとすると、すでに歪んでしまった他の人びととの思いと対立していくこととなります。しかもその対立は次第にどうしようもなく深まっていき、とう

とう相手の命を奪うほどの感情にまで膨れ上がっていったのです。

一生懸命神のために尽くしたつもりであっても、また誠実に向き合ったつもりであっても、神の視点から見たときに歪んでいるという現実がわたしたちには起こり得るのです。そして、これはわたしの姿でもあり、また現在の教会の姿でもあります。

ボンヘッファーという神学者が、「共に生きる生活」という論文の中で、次のように述べています。

「キリスト者の兄弟関係は、理想ではなくて神的現実である、キリスト者の兄弟関係は、霊的な現実であって心理的な現実ではない」と。

また、キリストを真中にした真の兄弟姉妹という関係を、ボンヘッファーはこのように言います。

「まことの兄弟とは、ただイエス・キリストを通してのみ、他者に対して兄弟であるのです。その人とわたしが交わりを持つようになる兄弟ではなく、キリストによって救われ、その罪を赦され、信仰と永遠の命に召された他者」が共に存在しているということがまことの兄弟の交わりだ、と。

実生活で仲が良いかどうか、意見が合うかどうかは全く関係なく、キリストによって救われた者が、神との交わりを通して、それ以外の人びとのために生きるという時に、わたしたちはまことの神の子となります。

わたしたちが、「教会とはこうあるべき」という理想像を自ら明確に持ち、またその理想を実現しようと努力しても、もし自分の理想や夢に固執し、そのために排他的な関係、つまり交わりを損なうようなことが起こったとするならば、そのような幻想すらも神は砕いてくださり、神の国の姿のしるしである教会そのものを自分のイメージに閉じ込めようとする力から、わたしたちを解放してくださるのです。

わたしたちはどうやってそのことに気づくのでしょうか。それはエレミヤに対する神の言葉、弟子たちに対する主イエス様の言葉と行いです。それをわたしたちは聖書を通して示されるのです。

今日のみ言葉でわたしたちは思い出します。預言者エレミヤも、主イエスの弟子たちも、他の人々の理想の押し付けや幻想の強要の故に命まで狙われることになっていたという歴史の繰り返しを。そしてわたしたちは振り返るのです。現代の預言者エレミヤや主イエスの弟子たちの声を、わたしが聞く準備ができているかということ。

直接的な関係がなくとも、キリストを通して他の神の子と共に信仰共同体を形成し、神と人ともに仕える恵みを、神はわたしたちに与えてくださいました。ひとつの教会を通して、そして世界に広がる教会を通して、この恵みは与えられました。そのことに、今日はご一緒に大いに喜び、感謝をささげたいと願います。

そしてわたしたちの神の子としての交わりがキリストによってのみ近づき強められ、わたしたちがみ言葉に寄って立ち、ますます世界に向かって宣教する共同体として整えられていくように祈り求めます。

直接会えないこの時だからこそ、神のみ心のみを寄り頼み、同じ神の子としての姿をそれぞれの場所において世界に示していくことができますように、心から願い祈ります。